八幡竈門神社のまつり

土屋公照

八幡竈門神社は、内竈町の亀山と呼ばれているゆるやかな丘陵に鎮座している。

亀川国立病院前の交差点をを右に折れ、安心院線にそって少し行くと、右手に竈門神社の常夜燈にであう。石段をのぼり正徳元年（一七一一）建立の鳥居をくぐると、参道の急な石段は、二、三の鳥居をへて本殿の正面に出る。

明治二十年に上棟された切妻平入の本殿と拝殿を中心にして、境内は、安政四年に勧請された多賀神社などの境内社や数社の祠が安置されており、イチイカシ（市指定保護樹）やクスの巨木が繁って森閑といた一郭をつくっている。また、享保十九年に日田代官岡田庄太夫が奉納した石灯篭が、神社に貫禄を添えている。

竈門神社の祭神は、仁徳天皇の時に祀られたとされる三十三神に、神亀四年（七二七）三月十五日宝城峰に白髪の大神比義に導かれて降臨した仲哀・應神天皇と天長三年（八二六）に宇佐より勧請された神功皇后の三神霊を加えた三十六神である。

竈門神社の主なお祭りは、四月十五日（旧暦三月十五日）に行なわれるの例祭と、十月の豊年祭であろう。なかでも四月の例祭は、神霊が八重桜を依代として降臨したと云う言い伝えから、八重桜を供えるので、いち名「桜祭り」とも呼ばれている。

土屋家文書によればこの大祭は、大友氏が興したとも復興したとも伝え、その起源は、元治元年（一一九九）に遡ると云う。

竈門神社の祭礼復興について、安政年間の記録はつぎのようである。

（亀川庄屋記録）

安政四丁巳歳

一八幡竈門宮祓御幸の義　二百六十余年中廃して年々御幣のみ三本松へお供えいたしこれあるところ　再興の義早春より思い立ち　社家は勿論この方など心配いたし　五ケ村大小家別へ献金いたさせ　神輿ならびに行列道具調え方のため　二月廿八日野田運平ならびに大宮司隠居矢黒常陸・亀川村長左衛門船にて登坂・京大坂にて諸品あい調え　五月廿四日右船にて帰国　但し三月下旬より御下り道筋繕いのため五ケ村より出夫

一六月廿九日御祓お祭礼　八幡竈門宮三本松へ行幸の義当年始めの儀に付き　前方より御仮家其の外品々出来の上　賑々しき御行列あい調い候　相撲場など桟敷賄向きはこれ迄も願元順番にて引き請け当年平田村但し右行列引き請け当年内竈門村初めにて古市・亀川平田・野田とあい廻し候よう評議候

つまり、竈門神社の三本松への御幸は、安政年間まで永らく途絶えていたが、亀川庄屋高橋萬之丞が五ケ村に呼び掛けて復興したこと、また、次の「覚」のように行列道具を新調したこと。また、この年に祭り座の順番の割り当ても決まったことが記録されている。

覚　（安政四年か　高橋文書）

一　榊持　　烏帽子　木綿狩衣　　壱人　　料　壱分二朱

一　猿田彦命　　烏兜　清装束　　木綿大口　鉾　　壱人　　料　三両弐分

一　御幣持　　烏帽子　木綿狩衣　　壱人　　料　壱分弐朱

一　阿磨　　男弓　木綿狩衣　　女榊　同白袴　　弐人　　料　弐両

一　長刀　　袋ヒヘタン　　上下　弐人　　料　壱両

一　弓鉾　二　　白木綿付　　上下　弐人

一　大鉾　二　　陣笠　鎧着　　料　弐歩　弐人
一　御供笛　四管　　料　九兩
筒入　　上下　四人
一　御太刀　三腰　　料　壱兩　　同　三人
一　神輿　三社　　料　六兩　　廿四人
一　同舁人足　　白狩衣　　廿四人前
一　小鉾　六本　　六人
一　流的馬　　赤清狩衣　青同断　　料　弐兩壱歩
烏帽子二　色付　木綿差抜二　　弐人
料　弐兩
一　赤黒獅子　　體の衣とも　　二疋
料　三兩
一　持弓　　飾箭とも　　上下　六丁
一　鉄砲　　緋ヘタン袋入　　料　六兩　　同　十六丁
料　五兩
一　白毛鎗　　木綿　ハッピ着　　廿人
料　拾兩
一　幕　　一張
料　壱兩壱歩
一　御仮家

この年、すなはち安政四年には「覚」のような新調された道具立てで、御幸の行列が賑々しく繰り出されたのであろう。

四月の大祭が近づくと、それぞれの地区で役柄に応じた氏子が選ばれる。とくに手のこんだ所作を演じる傘振・手槍・島田頭・大鳥毛・大羽熊・大鉾などの役は、経験のつんだ指導者によって念入りに稽古が続けられる。この指導者は、祭りの当日には阿麻余護となり演技の采配を振ることになる。

やがて、大祭の五日前の四月十日に「陣揃」をして、衣装合せや仕上げの合同練習を行ない、壮麗な大名行列の準備ができ上るのである。大祭当日、大名行列は賑やかな神楽組の先導で参道の坂を下り、演技を繰り返しながら御旅所まで神輿の御供をする。

かまど神楽の神楽組は加藤家が主宰した。この神楽組は竈門神社の例祭に神楽を奉納したが、各地の祭礼に招かれて出演した。

かまどの神楽組は、四月の竈門神社の大祭には、行列の前で面や装束を着けて神楽を演じた。これを「道かぐら」といい、賑やかなお囃しで御神幸を先導した。しかし、現在では神楽を舞える人がなくなり、神楽組が活動をしていないのは残念である。

現在行なわれている大名行列の陣立と道具立ては、明治三〇年代の「例祭神行道具台帳」に記録されている道具立てをもとにしている。

汐振　二名
猿田彦　一名　但シ面壱個　装束上下悉皆相添
国　旗　二名
社名旗　一名
真　榊　二名　但シ台付　其外悉附属品付
獅　子　四名　獅子頭弐頭　但シ衣服弐枚
附属品悉皆相添
四神旗　四名
随　神　二名　随神弐人前　但シ附属品悉皆相添
日月錦旗　二名　錦旗　弐本　但シ柄付キ
大　麻　一名
阿麻余護　二名　海士面　但シ弐個　衣服弐枚相添
傘　振　一名　傘振弐人前　但シ衣服弐人前

手　槍　一名
島田頭　四名　島田頭弐本　但シ衣服四枚
帯四筋　上帯四筋
笠四個　木太刀四本
柄弐本

傘　槍　一名
手　槍　一名
大鳥毛　四名　鳥毛弐本　但シ衣服四枚
帯四筋　上帯四筋
笠四個　木太刀四本
柄共

大羽熊　四名　羽熊弐本　但シ衣服四枚
帯四筋　上帯四筋
笠四個　木太刀四本
柄弐本

毛手槍　十名　毛槍拾本　但シ衣服拾枚
笠拾個　木太刀拾腰
柄十本

袋弐個紐附

猩々緋　拾五名　猩々緋拾六　但シ木鉄砲拾六個
上下衣服拾六人前

長　刀　一名　長刀壱振　但シ袋付キ
大　鉾　一名　大鉾弐本
仝付添　一名　大鉾鎧弐領
大　鉾　一名　但シ白木綿四反
笠弐個　木太刀弐本

仝付添　一名
大　笛　六名
太鼓打　一名
太鼓引　二名
紙大幣　一名
金　幣　一名　金幣四本　但シ内竜区船松右田姓
ヨリ壱本
他三本ハ
小畑曽市　壱本
吉田利代吉
伊藤繁太郎
佐藤寿助

吉良伊次郎
伊藤安吉
五人弐本

神鏡　一名

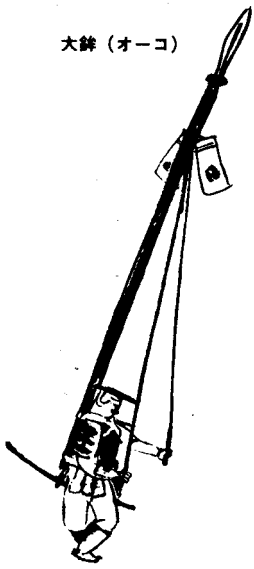
弓鉾　二名　大弓弐張　但シ白木綿二個
弓弐張
臺弓六張　但シ結紐六筋
弓矢共
（弓鉾は、大弓か臺弓か不明）

御太刀　一名　神輿附太刀三振
但シ金襴袋付三個

汐振　一名

神輿　三拾名　神輿　三社
但シ装束白木綿上下弐拾四個
烏帽子弐拾四個　結縄木綿三反
手縄鈴付拾弐本　神鏡拾弐面
水引金襴三張　ヨウラク拾弐枚

宮司　一名



竈門神社の行列の特色は大鉾（オーコ）である。

大鉾の役は、氏子中の独身の青年に限られている。三尺をこえる大鉾は、かなりの重量があるので、屈強な青年でないとつとまらない。以前は、大鉾に選ばれた青年は、祭りの一週間ほど前から海で禊をし、食事も家人とは別の火で調理して、精進潔斎につとめたそうである。

大鉾の装束は、鎧の胴丸の背中に大鉾を結わえ付け、浅い笠に、簡単な壷袖と草摺をつけ、太刀をはき脛当に草鞋をつける。

演技は、大笛と太鼓の囃しにあわせ、大鉾の先端より導かれた紐を両手で左右に引っ張り、均衡をとりながらゆっくりと力強く舞う。おわりに「頬に砂がつくほど」低く前かがみになり鳥居をくぐって演技がおわる。

他の道具の演技については、賀来神社の系統を引くといわれる朝見神社のものと大差はないが、大鉾を中心とする竈門神社の行列は、日出町の若宮八幡社のものと同系統といわれる。

さて、旅所での祭りであるが、その賑わいについて、亀川村庄屋であった高橋氏の文書に、祭りの興行の請負願いが残されているので参考にしたい。

差上申御請書の事

此度産土神八幡竈門宮御祭礼に付き賑の為軍書仕形講談興行の儀先達て御願い申上げ候処　高松表御願い済相成り候上私へ世話方仰付られ難有御請け申し上候　右に付興行中火の元念を入るべき儀は申すに及ばず　自他より人集候に付喧嘩口論其の外すべて故障なる儀これ無きよう　猶又軍書講談仕り候組合の者ならびに右興行に付き入り込みの者御法度の博奕など決して仕らず候よう細心を用い　若し右体の儀相催し候者これ有候はは早速差留心得違い仕らずよう申すべく候　万一村内其外入込みの者共不埒の儀これ有り候はは、其者共は申すに及ばず私迄も不行き届きの儀きっと仰せ付けらるべき旨承知仕り候　はてまた売女芸者など入りこみ申さずよう精々細心をもちい　市中無難の儀心がけ世話仕るべき旨仰せ渡され畏れ奉り候　若しいささかにても不埒の儀御座候えばきっと御取調べの上　たとえ私承知仕らず儀にても存ぜずと申す儀あい立ちがたき旨御沙汰のおもむきいちいち承知仕り候　しかる上は決して御厄介筋でき申さずよう仕るべく候　これに依り御請印形差し上げ奉り候　以上

嘉永二酉年十月

亀川村御役所　　亀川村　　度郎 ㊞

祭りの請負者は、見せ物小屋の小屋掛は勿論、喧嘩口論から火元用心、ひいては賭け賭博、遊女芸者や胡乱者（怪しい者）の入り込みにも細心の注意を払った。三本松での竈門神社の大祭は、他村も者も多く集まり、横灘筋の北組では最大の賑わいであったことが伺われる。